

レッジョ・エミリア教育の美的活動における学びの「可視化」2

三 梶 正 典*

(2014年11月12日 受理)

“Visualization” of Learning in Esthetic Activity of the Reggio Emilia Education 2

Masanori MIMASU*

This study tries “visualization” of the aesthetic activity of the infant to a base with an education system of the Reggio Emilia preschool education. I planned “visualization” of clearer learning by doing 4 points of criterion referenced evaluation with an index in this study to greet the second year, and making learning digitizing, illustration.

Keywords: the childhood-education system of the Reggio Emilia レッジョ・エミリア幼児教育, visualization 可視化, criterion referenced evaluation 観点別評価

1. はじめに

レッジョ・エミリア教育の美的活動における学びの「可視化」研究が2年目を迎えた。昨年は、先ず美的活動を中心にその創造的体験によって子どもの個性や可能性を最大限に引き出しているレッジョ・エミリア教育の学びに着目し、学習過程モデルを作成した。その後、その学習過程モデルを美術館にて実践し、その学びを「可視化」させる試みを通してその効果を示してきた。「可視化」の特徴的なところは、「分かりやすさ」である。レッジョ・エミリア教育は、佐藤学(2001)が「創造性の教育」の最高の姿とその条件のすべてが表現されていた¹⁾と述べているように美的活動そのものに「分かりやすさ」があり、そのことによってより多くの感動を与えてくれる。その大きな要因は、子どもたちの作品にあり、その作品を作り出させる教育システムにある。そこで本研究では、昨年の実践を引き続き行なうなかで、レッジョ・エミリアの教育システムだけでなくその独自の様式にも触れ、その様式に評価の4観点の視点を加えた「可視化」を試みながらその効果を考察したものである。

2. レッジョ・エミリアの教育システム

レッジョ・エミリアの教育システムの特徴は、美的活動を中心にその創造的体験によって子どもの個性や可能

性を最大限に引き出しているところにある。中でも「ペタゴジスタ」と「アトリエリスタ」の存在は、幼児教育において他に類を見ない特徴的なシステムである。佐藤(2001)は、そのシステムを以下のように述べている。

レッジョ・エミリアの幼児教育は、独自のシステムと独自の様式によって実現している。特に数校に一人配置されている「ペタゴジスタ」(教育学者)と呼ばれる教育主事と、各校に一人配置される「アトリエリスタ」(芸術家)と呼ばれる芸術教師は、レッジョ・エミリア教育において中核的な役割を果たしている。ペタゴジスタは大学で教育学を専攻した経験をもち、教育の実践を教育研究と結びつけ、担当する学校の園長の役割を担って研究と実践を指導し、教師と親との連携を築く役割を演じている。他方、アトリエリスタは、大学で芸術を専攻した教師であり、教師と子どもの創造的活動を支援する実践を展開している²⁾。

(1) ペタゴジスタ(教育学者)の役割

レッジョ・エミリアの幼児教育システムの重要な一つとしてペタゴジスタの存在があるが、その役割は、「6歳以下の子どもを対象とする市の教育プログラムの質を一貫して保ち続けること。第二に、システムにおける行政的、技術的、教育的、社会的、政治的要素を統合し調整することです³⁾とある。具体的な活動としては、子どもの発達とその指導についての問題を取り上げるミーティングを開いたり、技術的な技能の習得を目指すワーク

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科教授

ショップを行ったりしている。言わば、専門家の見地からの現場教員へのアプローチを行っている。ペダゴジスタが教育現場に加わることで、一定の質の教育を保持する機能が常に存在していることになる。



図1 ある教室の二人の教師と、ペダゴジスタとのワークセッション

(2) アトリエリスタ（芸術家）の役割

ペダゴジスタは、イタリアの教育制度の中に位置付けられているのに対して、アトリエリスタは、レッジョ・エミリアで生まれた独自のものであり、独自の役割を持っている。その役割は、アトリエの持つ機能に対するアプローチを教えることである。レッジョ・エミリアびアトリエリスタのヴェア・ヴェッキ（Vea Vecchi）は、アトリエの機能について以下のように述べている。

アトリエには二つの機能があります。まず、アトリエは、子どもたちがあらゆる種類の技術をマスターする場所です。彩色、線描、粘土など、あらゆるシンボルによる言葉の習得です。第二に、アトリエは、子どもがどのように学ぶかを大人が理解するのを助ける場所でもあり、子どもがどのように表現上の自由、認知的な自由、シンボル操作の自由、そしてコミュニケーション回路の自立的な手段を発明するのかを、教師が理解するのを助けます⁴⁾。

今回の実践では、上記のシステムをモデルとし、教育の実践研究を行っている園長と芸術教師である筆者と、クラス担任3名とでワークセッションを行い、美的活動によってより子どもたちの個性や可能性を最大限に引き出すことができるようなプログラムを作成した。

3. 可視化

レッジョ・エミリア教育では、美的活動を記録することや共有するという過程を完成作品と共に提示することで、学びの「可視化」を行なっている。特に7つの指標（関係の形態、光、色彩、素材、におい、音、微気候）は、それぞれが癒合的に機能しながら展開され「可視化」されている。昨年度の研究は、ローリス・マラグツィ

国際センターの場所・空間との対話による美的活動に着目した。この美的活動の关系的形態、光、色彩の指標による「可視化」は子どもたちの持つ知性と創造力の可能性を見事に引き出しており、それぞれが美的活動のアクセントの役割をもちながら、「可視化」を形成していた。そこで、レッジョ・エミリア教育の学びを「可視化」させる美的活動の具体的な方法として、「場所や空間」における動きを見つめ、その中から出てくる言葉に耳を傾けることと、「共通の形」をベースに美的活動を展開させる2点に着目した学習モデルを作成し、実践した。学びの「可視化」については、ひろしま美術館という「場」と園児達がピカソの絵（女性の半身像）を用い、同じ絵を見て、同じ部分の続き絵を描く過程から、それぞれの感じたことが、違いとして、個性として表現されているかどうかという検証を計る授業実践を行った。共通の形から様々な展開していった園児の作品から、実践を通じた学びがより創造性を広げた「可視化」となっていった。また、美術館という場所や空間との出会いは、日常過ごしている空間と違った新鮮な気持ちを与え、様々な気づきや発見を誘発させ、個々のもつ「創造性」を引き出すきっかけとなった。しかしながら、「可視化」は、園児の作品を中心に、表現活動の過程を通して見取る方法に限られており、図画工作が抱えている客観的な学びの「可視化」には至らなかったことが、課題として残った。そこで今年度は、昨年度の学習過程モデルを踏襲しながらも、学習過程に新たな指標を加え、数詞化させることによって、より客観性を持たせる「可視化」を試みた。その指標が、文部科学省が指導要録などで示す「評価の4観点」である。

4. 評価の4観点と4つの力

図画工作や美術における表現や鑑賞の活動の制作過程には、児童・生徒一人ひとりの資質や能力、個性がしっかりと働いている。その一人ひとりに寄り添い、学びをしっかりと確認していくことが評価である。図画工作や美術には評価の4観点が（図1）のように示されている。この評価の4観点は、それぞれの学年で行われる題材においてより明確にし、具体的な指導を評価の手だてを設定し、実践されている。

この評価の4観点は、教育基本法・学校教育法の改正において教育の目標・義務教育の目標と共に明確に示された学力の3要素（1. 基礎的・基本的な知識・技術の習得 2. 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等 3. 学習意欲）にも関連づけられている。また、山梨県では、評価の4観点

評価の4観点	趣 旨
造形への関心・意欲・態度	自分の思いをもち、進んで表現や鑑賞の活動に取り組み、つくりだす喜びを味わおうとする。
発想や構想の能力	感じたことや材料などを基に表したいことを思いついたり、形や色、用途などを考えたりしている。
創造的な技能	感覚や経験を生かしながら、表したいことに合わせて材料や用具を使い、表し方を工夫している。
鑑賞の能力	作品などの形や色などから、表現の面白さをとらえたり、よさや美しさを感じ取ったりしている。

図2 評価の4観点と趣旨

を(図2)のように「4つの力」に置き換え、学年に合わせて子どもたちにもわかる言葉に置き換え、子どもたちと4観点を共有する実践し、学びの「可視化」の発信を行っている。元美術教諭で現在北杜市立明野中学校の鷹野晃教頭は、「4つの力」について以下のように述べている。

	造形への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
第1,2学年	たのしくやろう!	かんがえよう!	いろいろやってみよう!	たのしくみよう!
第3,4学年	進んでやろう!	いろいろ考えよう!	ためそう!工夫しよう!	見つけよう!
第5,6学年	思いをもって楽しもう!	思いに合わせて考えよう!	思いに合わせて工夫しよう!	見つめよう!

図3 評価の4観点と4つの力

山梨県の先生方で、図画工作・美術で育てる資質や能力である【造形への関心・意欲・態度】【発想や構想の能力】【創造的な技能】【鑑賞の能力】の四つを子どもたちにも分かる言葉にしてカードにしました。「図画工作・美術で働かせる“四つの力”」と呼んでいます。これを授業の最初に黒板に掲げることで、子どもたちと共有しようという考えです。

5. 美的活動の学びの「可視化」を学習過程モデルとした実践

これまで色々な教育概念や教育方法などをもとに、ひ

ろしま美術館で実物の絵や彫刻を鑑賞し、その後表現活動を行う創造的体験を通して、子どもたちの「創造性」を引き出す試みを行ってきた。昨年度は、レッジョ・エミリア教育の美的活動の「可視化」を学習過程モデルとし、子どもたちの作品鑑賞から表現活動へと向かう実践を行った。その方法は、美術館での子どもたちの動きを見つめ、言葉に耳を傾けることと、共通の形から発想を展開させていく方法である。今回の基本的な学習過程は、前回のピカソ作「女性の半身像」描く実践の流れを基にしているが、活動の過程の中で評価の4観点・4つの力の指標を加えた「可視化」の方法を取り入れて以下のように実践した。

(1) 学習過程モデル

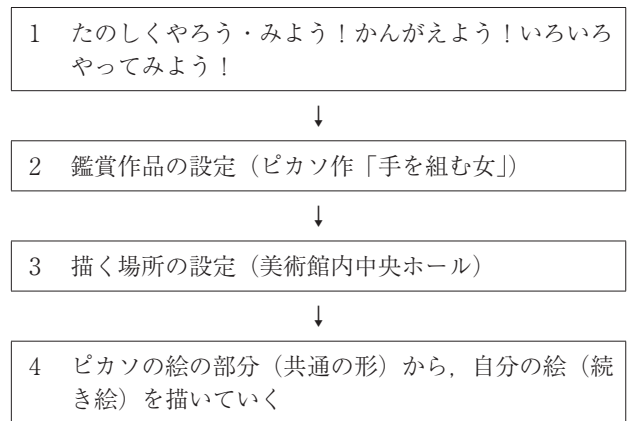


図4 美的活動の学びの「可視化」を基に4つの観点・4つの力を指標とした学習過程モデル

(2) 授業実施場所・日時・対象園及び学年の園児

実施場所 ひろしま美術館 常設展示室及び中央ホール

日 時 2014年10月10日(金) 11:00~11:30

対象園 ゲーンズ幼稚園 年長園児 82名

(3) 学習のねらい

本学習では、以下のようなねらいを設定し、実践した。

- ①美術館の作品を楽しくみることができるようになる。
- ②ピカソ作「手を組む女」(図5)を見て気づいたことを「手を組む女」の部分(共通の形)(図6)から一人ひとりが発想を広げて描くことができるようになる。
- ③美的活動から図画工作・美術で育てる資質や能力である4観点「造形への関心・意欲・態度」「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」から導き出された4つの力を引き出すことができるようになる。

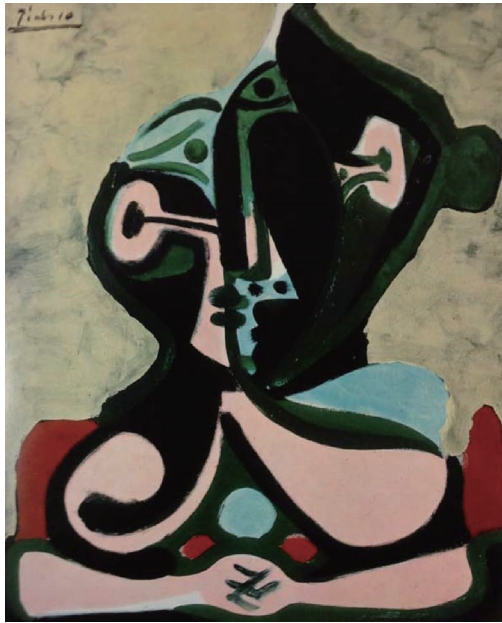


図5 ピカソ作「手を組む女」



図6 「手を組む女」の部分

6. 結果

(1) 学びの過程の「可視化」

今回も前回同様、鑑賞作品の一部の形を基にその続き絵を自由に描く美的活動を行った。共通の形からスタートしているものの、同じ絵を通して感じた思いや気づきは、一人ひとりの感性が加わり、様々な表現へと展開している学びの過程が作品から明確に知ることができる。(図9 園児作品)

(2) 評価の4観点(4つの力)の「可視化」

学びの「可視化」をより明確にするために、指導要録などで示されている評価の4観点(4つの力)【造形への関心・意欲・態度】【発想や構想の能力】【創造的な技能】【鑑賞の能力】を指標にし、一人ひとりの美的活動を担任の先生に評価してもらい、数値化し図式化する試みを行った。

それぞれ、1・0・-1と3段階評価とし、通常の美的活動と同様の様子を0とし、プラスマイナス1で差を評価していただいた。(図7)は、年長児81名のそれぞれの観点の平均値を図式化したものである。日常の美的活動の様子と比べると、どの観点もかなり高い数値が出ている。4観点を比べると「発想や構想」の評価が高く、「技能」の評価が幾分低くなっている。また(図8)は、男女別にそれぞれの観点の平均値を図式化したものである。

どの観点も男女を比較すると女子の方が高い数値を示している。女子の数値の最も高い観点は、「発想・構想」で、最も低い観点は、「鑑賞」。それに対して、男子の数値のもっとも高い観点は「鑑賞」で最も低い観点は「技能」となっている。

7. 考察

美的活動における学びの「可視化」については、昨年・今年とひろしま美術館という「場・空間」で実施した。「可視化」の一つの方法として、園児の美的活動の活動過程が明確にわかる「続き絵」の方法を用いた。題材とした絵は同じ作家(ピカソ)ではあるが「女性の半身像」から「手を組む女」に、変えてみた。一つの共通の形から続く絵は作品が変わっても、見て感じたことが、それぞれの個性として表現されていた。このことは一つの学びの「可視化」として示すことはできたと考えられる。しかしながら作品による「可視化」だけでは、具体的に客観的な学びをに示す「可視化」になっていないという課題が残った。そこで、今回は、評価の4観点を指標に図示化する方法により、より具体的な学びの「可視化」を試みた。その結果から考察すると、図7から見られるようにほとんどの観点で、日々の美的活動と比較して高い数値が見られた。空間や場での美的活動が有効に働いていたことがわかる。中でも、発想や構想などといった、想像力を働かせるところにおいては、特に有効にはたっていた。図8は、男女を比較したものであるが、男子よりも女子に有効に作用していたことがわかる。しかしながら、4観点のなかで女子は、鑑賞が一番低い数値に対して、男子は、鑑賞が一番高い数値を示している。このことは、女子は、みる・かんがえる・かくを比較するみるに対して、かんがえる・かくに度合いが高く、一方、男子は、みる度合いが一番高く、かく度合いが最も低くなっている。発達段階における男女の違いがそのまま現れているとは言えないが、みる傾向とかんがえる・かく傾向の違いは、興味深い数値を示していた。

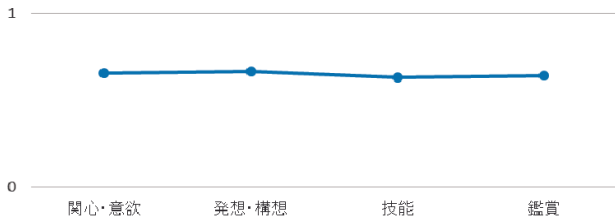


図7 ピカソ作「手を組む女」の美的活動後の園児の様子 (評価の4観点)

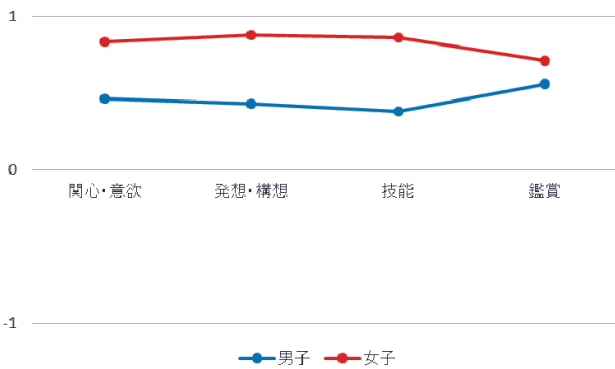


図8 ピカソ作「手を組む女」の美的活動後の園児の様子 (評価の4観点) 男女別

8. まとめ

レッジョ・エミリアの教育システムをベースに美術館という場所で一つの共通の作品を見て、同じ画像を起点に続き絵を描く美的活動は、作品を通して見ても学びがより創造性を広げた「可視化」となった。一方、活動の指標を明確に数値化する今回の「可視化」は、より具体的に美的活動の成果や課題を示すことができ、より効果的な学びの「可視化」を示すことができたと思う。今後は、美的活動における学びの数値化された「可視化」に着目し、発達段階や男女差などに調査対象の比較や指標の項目も検討を加え、より明確な具体的な学びの「可視化」を示すことができるよう研究を進めていきたい。

引用文献

- 1) 佐藤 学, 「レッジョ・エミリアの教育とその背景」『子どもたちの100の言葉－レッジョ・エミリアの幼児教育』, 世識書房, p. 498, 2001.
- 2) 同上, p. 504.
- 3) ティツィアナ・フィリッピーニ, 「ペダゴジスタの役割」『子どもたちの100の言葉－レッジョ・エミリアの幼児教育』, 世識書房, p. 192, 2001.

- 4) ヴェア・ヴェイキ, 「アトリエリスタの役割」『子どもたちの100の言葉－レッジョ・エミリアの幼児教育』, 世識書房, p. 211, 2001.

参考文献

- 三樹正典, 「レッジョ・エミリア教育の美的活動における学びの「可視化」」『広島女学院大学 人間生活学部紀要』, 広島女学院大学人間生活学部, pp. 39-46, 2014.

図・表出典一覧

- 図1 『子どもたちの100の言葉－レッジョ・エミリアの幼児教育』, 世識書房, p. 195, 2001.

- 図5 収藏品図録－西洋編, 『ひろしま美術館』, pp. 140-141, 1994.



図9 作品鑑賞



図10 続き絵制作風景



図11 園児のひろしま美術館で描いた作品